

介護学生が体験したヒューマン・ケアリングの過程

—介護老人福祉施設における高齢者との関わりを通して—

遠藤幸子¹・新井美保子²・室戸真也³・三輪幸子⁴

(1: 東海学院大学 2: 東海学院大学非常勤講師

3: 特別養護老人ホーム椿野苑 4: グループホーム大洞岐協苑)

要 約

本研究の目的は、介護学生が介護老人福祉施設において実習中に体験したヒューマン・ケアリングの過程を明らかにするものである。4年制大学に在籍する介護実習がすべて終了した段階の9名の学生を対象に半構成的面接を行い、質的分析を行なった。その結果、【直接的に励まされ癒された体験】【共にいる「つながり」の実感】を内容とする『人間対人間の関わり』と【利用者への尊敬と共感のまなざし】【介護の社会的役割を踏まえた上で自覚した自己の存在価値】を示す『介護専門職としての関わり』の2つのコアカテゴリーを見出すことができた。ヒューマン・ケアリングの体験に至る過程は学生にとっては容易ではなかったが、そういった過程を踏んだことで体験した出来事が深く心に残った。その結果、前向きな気持ちや積極的な行動へと変容し、介護福祉士としての将来への希望につながった。信頼関係構築の過程そのものがヒューマン・ケアリングであり、『人間対人間の関わり』と『介護専門職としての関わり』が両輪となる介護実践能力が介護福祉士にとって必要であることが示唆された。

キーワード: ヒューマン・ケアリング、介護学生、介護実習、高齢者、介護施設

研究背景・目的

介護福祉士の国家資格を取得するために必要な教育カリキュラムのなかでも、介護実習は理論と実践を統合し、介護観の育成を目的とした中核的な位置づけにあり、学内での授業や演習の集大成として大変重要な科目である。

実習先では実習指導者や介護職員の指導の下、様々な利用者との関わり、介護技術の実践方法や介護計画の立案・実施について学ぶ。4週間の実習期間の終了時には「利用者との心が通じたという感覚が持ててとても嬉しかった」と学生が笑顔で述べる場面がある。このことは「介護観を育成する」という介護実習の最大の目標につながる貴重な体験であったといえる。

「ケアする人、ケアされる人に生ずる変化とともに成長発展をとげるもの」というメイヤロフ(1987)が述べる「ケアの本質」の視点から実習教育をとらえると、21～22歳の青年期にあたる介護学生が、実習先において利用者との関わりから得られる喜びや充実感は、学生個々の人間的な成長に大きく関与するのではないか。さらに、現場という実践環境でしか得られないケアリング体験は、専門職としての自信や誇り、使命感につながる重要な体験になるのではないか。

介護は誰にとっても身近な問題であり社会への必要性が高い職業であるにもかかわらず、テレビ等によるメディアからの表面的なネガティブな情報のほうが強い印象となっており(林,2016)、その影響もあるのか介護系への進学者減少には歯止めがかからない状況になっている。

しかしながら、介護福祉士の仕事とは、職場での勤務上の苦労や悩みはあったとしても、「人間的な温かさや穏やかな時間が与えられ、その人の人生の終盤～最期にも関わる尊い専門職である」ということを、もっと広く認められるべきである。つまり、日々誇りと使命感を持って従事している多くの介護職のことが、社会に十分届いていないだけではないかと思われる。介護を学ぶ学生が介護福祉士の仕事をプラスのイメージを持って前向きに捉え取り組んでいけるように、今後の介護人材育成の観点からも、ケアリングの過程を明らかにし「魅力ある介護」を提示していく必要があると思われる。

介護実習に関する文献には、実習に対する不安感や心理的なストレスに関するもの(横山,2008)、実習における介護観の育成に関するもの(吉田,2015)は見られるが、介護学生のケアリング体験に関する研究は見られない。教育に関するケアリングの文献では、ケアリング

の概念に関するもの(永島,2013)、看護系大学のカリキュラムとして「ヒューマン・ケアリング」を基盤に科目が組み込まれている場合の教育評価に関するもの(山本,2012 山田,2013)、教育方法としてのケアリングカリキュラムの研究(戸村,2011)は見られるが、介護福祉教育ではケアリングを教育内容にしてその実践評価を研究したものは見られない。

本研究の目的は、ヒューマン・ケアリング実践の場である介護老人福祉施設において、介護学生が利用者との関わりのなかで体験したケアリングの過程を明らかにすることである。

ケアリングとは

「ケア」や「ナーシング」と1970年頃まではほとんど同意語として使われてきた「ケアリング」は、看護の領域はもとより、福祉や教育学の領域など広く適用されるものであるとミルトン・メイヤロフやシスター・M・シモーヌ・ローチ(1996)の著書において述べられている。我が国においては、1989年から1992年に日本看護科学学会が「ヒューマン・ケアリング」に研究課題として取り組み、看護の研究者、教育者、実践者への「ケアリング」論の普及が始まった。

わが国の看護における「ケアリング」理論の導入と研究の動向に関する研究(永島,2013)によれば、ケアリングの概念が導入された当初から10数年の間には、時代の流れを背景にケアリングの概念に様々な変化がみられる。

被ケア者を「理解する」「固有の存在として捉える」「関心を向ける」「人間性豊かに関わる」「成長を促す」「希望を支える」というような概念から、2010年代になると、被ケア者を『社会で生活する人』と捉え、「住み慣れた地域で生活を再構築できるようにする」「関係性を創造する」「能力を最大限に生かす」「目標を共有する」「被ケア者のその人らしさを支える」「被ケア者がその人らしく生きることを支える」というように、『共にいて生活の目標を共有する存在』へと転換が見られる。

ケアリングの目的・目標は、被ケア者の「希望や意思を支える」から変化して、被ケア者が「その人らしく生きる」ことができるように支えることとなり、地域社会で生活している人の地域環境や社会における存在様式、その役割へと広がっている。

ジーン・ワトソンは人間科学とヒューマンケアについて述べたワトソン看護論(1992)において、「ヒューマ

ンケアには、個人と人間の生命とに深い思いを寄せ、人間の自立と深いパターナリスティックでない価値観、選択の自由に対して深い敬意を払うことが必要である」と述べている。ケアリングとは、対象の人間の尊厳を守り、高め、維持することを目的に、対象との相互作用のプロセスを通して進めていく精神的な関わり、行為、現象である。つまり、ヒューマン・ケアリングとはケアの対象を人間と限定したうえでの、ケアによる相互作用を通してともに成長する態度や心であるといえる。

用語の操作的定義

ヒューマン・ケアリング：本研究では、介護学生と利用者が共有する体験の中に在り、尊厳を大切に扱いながら、相互成長がもたらされる関係が成立するプロセスを含む行為、現象をヒューマン・ケアリングと定義づける。

研究方法

1. 研究デザイン、研究協力者および研究期間

本研究は質的記述的研究デザインを用い、研究対象はA大学の介護福祉士養成課程に在籍し、研究協力に同意が得られた9名で、平成27～28年度介護実習Ⅱ(受け持ち利用者の介護過程を展開する4週間の実習)を行った学生。調査期間は平成28年12月～平成29年3月。

2. データ収集方法

半構成的面接法を用い、質問項目について自由に答えてもらおうインタビューを行った。インタビューの時間は1人当たり30分程度、インタビューガイドに基づき質問し、自由に語ってもらい対象者の許可を得てICレコーダに録音した。調査内容は、学生にあらかじめインタビューの質問内容を知らせ、話したいエピソードを選んでもらった。以下のインタビューガイド①～⑥の項目について、エピソードを語ってもらい、そのときの利用者の様子、自分が感じたこと、思ったことを素直に具体的に述べられるようにした。

以下はシスター・M・シモーヌ・ローチ著『アクト・オブ・ケアリング』に述べられている「職業的ケアリングの諸属性：五つのC 思いやり(Compassion)、能力(Competence)、信頼(Confidence)、良心(Conscience)、専心(commitment)」、ミルトン・メイヤロフ著『ケアの本質』I「他者の成長をたすけることとしてのケア」を参考にしたインタビューガイドの内容である。

①「高齢者に思いやりをもって接することができた」と

思う場面

- ②「介護の専門的な能力（知識・技術）を活用できた」と思う場面
- ③「自分は高齢者に信頼されている」と感じた場面
- ④「良心（道徳的意識）を持って「高齢者の尊厳を守る」ことができた」と思う場面
- ⑤「コミットメント（一生懸命、介護に専心）できた」と思う場面
- ⑥高齢者から学生が受けたケア：「高齢者に癒されたと実感したこと」「高齢者にケアしてもらったと思うこと」「高齢者と接して嬉しかったと思うこと」「それによって成長できたと思うこと」

3. 分析方法

「事例ーコードマトリックス」による質的データ分析法を用いた。インタビューで得られたデータを逐語録におこして精読した。事例ごとに学生のヒューマン・ケアリング体験の状況が示されている部分を、文脈に留意しながら1つのまとまりとして捉えた。そしてその文脈に沿って学生が語った内容から意味している最小の文節を対象者の言葉のままとし、それらの意味をできるだけそこなわないようにコード化し「事例ーコードマトリックス」に整理した。

「事例ーコードマトリックス」とは、いくつかの事例が横系、複数のコードが縦系として編み込まれ、さらにひとつのセグメントの記述によって複雑な模様が織り込まれているタペストリー（つづれ織り）のようなものとしてとらえることができる。質的分析の中間段階にこのようなデータマトリックスを作成してみることは、一方ではそれぞれの事例の個別性や具体性に対して十分配慮しつつ、かつ他方では、事例の特殊性を越えた一般的なパターンやある種の規則性を見いだしていくうえできわめて有効な作業になり得ると佐藤（2017）は述べている。

コード化したものは類似する意味のあるものを組み合わせサブカテゴリーとして、そのサブカテゴリーの意味が共通しているものを合わせて抽象度を上げ、カテゴリーとして再統合した。分析過程では複数の共同研究者とともに再検討や修正を重ね、真実性と妥当性の確保に努めた。

4. 倫理的配慮

本研究は、東海学院大学「人を対象とする研究倫理審査」を受けて承認を得てから実施した（申請ID 2016-5）。

対象者には書面と口頭で研究趣旨および内容について説明し、研究参加に同意する場合同意書に署名を得た。研究参加は対象者の自由意思によるもので、研究参加の拒否や途中辞退も可能であること、参加しない場合や途中で参加を中止した場合でも、学業、成績のことも含め不利益をこうむることは全くないことを説明した。

インタビューはプライバシーが守られる個室で行った。得られたデータは研究者のみが取り扱い、その他のものが目にするのがないように厳重に保管し、本研究目的以外で使用することはないことを説明した。

結果

研究協力者は大学生の男子3名女子6名で、年齢は21～22歳であった。学生が語ったケアリング体験は、1つのエピソードである場合、2つのエピソードの場合、また利用者や事例を特定しない日常の様子といったように内容は多彩であった。そのエピソードはいずれも実習4週間の期間中の半ば以降～後半の時期の出来事であった。そのうち、実習最終日の利用者との別れの場面を取り上げたエピソードが3例あった。

実習の中核を成す「介護過程の展開」としての利用者のニーズを把握して課題をあげケア計画を実施した受け持ち利用者とのエピソードは4例であり、受け持ち利用者以外の別の高齢者との関わりをあげたエピソードが5例、特定の利用者との関わりではなく複数の利用者との日常の関わりをあげたエピソードが5例あった。

ケアリング体験としてのエピソード（事例）、そのときの気持ち、その影響とその後の変化について表1のようにまとめた。分析の結果、学生のケアリング体験の状況として、2コアカテゴリー、4カテゴリー、12サブカテゴリーが抽出された。以下では、コアカテゴリーは『 』、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは〈 〉、学生が語った言葉をコード化し、「 」で示し、カテゴリーごとに説明する。

『人間対人間の関わり』は利用者と学生が人間的な温かい心を持って接した結果生まれたものである。それは【直接的に励まされ癒された体験】によるものであり〈日常のねぎらい・励ましによる勇気づけ、支え〉〈日々の挨拶やありがとうという言葉から得られる家族のような感覚〉〈実習最終日に得られた達成感〉となった。また【共にいる「つながり」の実感】として〈共に過ごす場と時間によって得られた安心感〉〈出会いと別れの体験か

表1 学生が体験したヒューマン・ケアリングの内容

コア カテゴリー	カテゴリー	学生	エピソード	うれしかったこと、癒されたこと	そのときの気持ち	その後の変化
人間対人間の関わり	直接的に励まされ癒された体験	A	フロアでたくさんご利用者さんというとき「いつもいつも大変なお疲れ様」と言われた。挨拶をしたら返された言葉「ありがとう」「ご苦労さん」	落ち込んでいたときに利用者の方から助けられた。今日も一日頑張ろうと勇気をもらえた	その言葉は最初意外だったがだんだん「がんばらないかん」と、ここで投げ出してはいけないと思つた	コミュニケーションが取りつらい人にも話していこうと思つた その人のそばにいと安心できた、そういう存在が必要だと思つた
		G	利用者から声をかけてもらえること、朝夕の挨拶での何気ない会話、遅番の時は、今日は遅いねと自分が実習に出ていることを知っていて気にかけてくれること、今日はこれであがり？あがり？あがり？という言葉	実習生を気にかけてもらえることが、一番嬉しかった。「ありがとう」って握手をしてくれる、握手だけではなく手をさすってくれる、そういうのが癒された	普段の生活ではまったく味わえない気持ち。知り合いに会って挨拶しても、ありがどうと言われるような機会はないんじゃないですか	挨拶は基本だから習慣的なかんじだった。挨拶をすることで会話ができるようになり、利用者側からの気遣いも生まれた
		E	握手して頑張るなさいよというかんじで励ましてもらったこと、気の強い女性の利用者で職員に対してきつめの言葉を言われたり拒否されたり口調が強かった、その利用者さん自ら握手を求められ「あー、ありがとう」という感じだった	いつも手は組んでひっこめた状態で自分から何かをしようとする事はなかった人だったので意外な感覚、驚きがあった。気づかずにいたが信頼関係に基づくものだった	最後に、ここに実習に来てよかったと思えた、高齢者とか障害者というのを除いた人と人が関わる場所のひとつが福祉の現場だと感じたのが一番大きかった	学校での学習で学んだ見方とはガラッと大きく変わったこと、介護する側、される側という関係ではなく、介護ケアには方法論の前に、人対人の自然な関係が大前提
		I	最終日の挨拶の時、「また来いよ」というようなことを大きい声で言ってもらえた。大きい声は人を呼ぶときの「おーい」という声ぐらいで初めてだったので大きい声で言ってもらえておひとつと思つた	別れのあいさつではいきなり大きな声で頑張れよと言ってもらえたこと	実習でのハイライト よかったな、という気持ちになれた	半年くらい経つてもこうして鮮明に覚えているのは、けっこう嬉しかったところ多かった、その結果、こう、覚えてるのかな
		C	利用者からあがりどうと言われたとき、あんな可愛いねと言われたときのこと、日頃の日常場面で利用者の様子、レクリエーションと一緒に居たときに感じた安心感	特定の一人ではなく何人かの笑顔がかわいらしく、笑顔になつてもらえるのが嬉しく、それで頑張れたこと、日常生活で一つ一つの利用者の行動を見ているときに感じる癒される気持ち	利用者から声をかけてもらえて、自分の存在価値が認められて、安心感ももてたので、職員にも多く質問ができた	頑張つて質問して得たアドバイスのおかげで利用者からもほっこりするようなものをのわいた
		D	お茶をすすめたとときの利用者との会話「私はもういいですからあなたどうぞ」というのが微笑ましく、話し方がかわいらしい、利用者と一緒に歌を歌ったり手をたたいて拍手をとったりしたのは楽しめた	うれしいなと思つたことはあつたがホツとした出来事やリアクセスできたという事はなかった	いろんな利用者さんがいるなかで、そういう方たちと接しつつ、やっぱり人と関わっていくんだな	様々な事情を抱える利用者や接しつつ人と関わっていく仕事につくことを再認識した だんだんに自分の気持ちが固まっていって4週間を終えることができた
B	実習最終日の挨拶時に「あがりどうね、また遊びに来てね」とやさしく言われたこと、拘縮があつて寝たきりであまり反応してもらえないし、私が上手くできないこともあつて、イラツとして、「へたくそ」って言われていた人だった	その言葉になきそうになった。その言葉が嬉しかった。感謝の言葉は初めてだった 感激して泣きそうになった	そんな心構えがなかった、意外だった。まさか感謝の言葉を言ってもらえるとは思ってなかった	こんな感覚な気持ち、その場面を思い出すと涙が止まらなくなる、別れになると・・・。介護は自分に合っているなど思う。卒業後も介護施設で仕事したいと思つている		
F	昔、そろばんを使って仕事をしていた受け持ち利用者のケアプランで、実際にそろばんを手にとっても、まらなくて、いつもよだれが垂れていた人だった、が、いつにも増してよだれをタラタラ垂らして、喜んで嬉しそうだった	利用者が喜ぶ姿をみてよかったなあと思えた	そろばんを喜んでもらえたときは心が通じていたと思つた	後になるとその方の立場を考えていなかったと思つたこと、仕事で十分やっていたのに、今になつても本当にやりたいことだったのか、実習のために利用者にも無理をさせてしまつていたのではないかと後悔した		

コア カテゴリー	サブカテゴリー	学生	エピソード	うれしかったこと、癒されたこと	そのときの気持ち	その後の変化
カテゴリー	利用者への尊敬と共感のまなざし	G	食事が摂れない胃ろうがある人で、褒めたい利用者 が、自分の名前をしっかりと覚えてくれた。絞り出 すような声で「ありがとう」と言われた	実習生である自分を気にかけてくれ ていること	驚いた、すごいなと思った	そういう姿をみると頑張る気持ちが出 て、やる気になってくる
		G	入浴介助が全介助で難しい人で、最初はうまくい かずに痛い思いをさせてくれた。2回目のときにうまく いったな、と言われた、2回目も同じ学生がやっていると わかってくれた	認知症はそんなにならない人だったかもし れないが、ちゃんと覚えていてくれ たことがとても嬉しかった	大々的に何かしたからというのでは なくて、日頃日中一緒に話して いらやっていたので、そこまでし れたんだと思う	辛いことがあってもその分、嬉しい 場面があると感じられる
カテゴリー	利用者への関心と気づきから 得られた尊敬の念	H	受け持ち利用者のレクリエーションと一緒に参加して みませんかと言った方との利用者同士の楽しそうな 姿、笑顔がみられたこと	利用者の楽しそうな様子、利用者同 士の交流の様子が嬉しかったし驚き もあった	ここまでうまくいくとは思わなかつた ので、ほっこりした反面、驚きがあ つた	利用者同士の関わりが演出できた。そ の人の力が出せることを実感
		H	食事介助をしようとしたら、パーンと手を叩かれた。そ れでショックを受けてへこんでしまったところに、その 方が叩いた腕をこめんねんねというかんじでなでてくれた 利用者なりにわかっていたのかとジーンときた	利用者のすまなかつたというよう なやさしい感じがジーンときた	自分の接し方が間違っていたかもし ないけれど、それを「ごめんね」と許 してくれたというかんじだった。	安全面の危機感を抱いたが、自分は 許されたという確信が持て、自信喪失 から救われた
カテゴリー	介護に専心したこと、築けた 信頼関係	I	あるとき、ずっと座って待ってみようと思った。 「家に帰りたい」「畑があるから」という言葉が聞けた。 隣で寄り添っている自分から話をしてくれることが あった。プロアデーで一人になると大声を出されること があったけれど、そういうのではなく、つぶやきというか、 帰りたい気持ちを伝えたいというかんじだった	利用者の思いが聞けたこと。自分に 語ってくれたという信頼関係が嬉し かった	介護をしているのなら、それは当たり 前のことかもしれないけれど、通じ合 えた場面は嬉しかった	利用者が本心を出出できような関係 性が介護には大切だと思ふ
		I	利用者が自ら話をしてくれるとき、些細なことだけでも嬉 しい。利用者が遠慮せずにはトイレや移動を頼んでもら えることが嬉しい	日頃の些細なこと、利用 者から声をかけてもらえることで自分が 信頼されていることを実感	信頼関係を持って接していった結果 としてすごいと思った 挨拶や雰囲気づくりはしっかりしてい たので結果につながった 会話の話題作りには地域のことや天 気のことなどその都度工夫した	対応するときは淡々と、すごくうれしい とは思わないけれど、後になってみる と、頼んでもらえることとお礼を言っ てもらえることはすごくうれしいことと感 じる
コア カテゴリー	自分自身は介護学生として認めら れたという自身の存在価値	D	自分の名前を覚えてもらったこと、「もうすぐいなくなる ちやうから、寂しい」と言われたこと	実習生として、認めてもらったとい うか、それがうれしかった	2回目に寂しい気持ちを言葉で言わ れたときは、うれしいという実感がわ いた	プロセスレコードに起こして振り返った みて、もっと利用者の「寂しい」気持ち に寄り添えればよかったと思った

ら感じた一期一会)〈利用者の喜びが自分の喜びと感じられ利用者の立場に立つ気持ち〉があげられた。

一方、『介護専門職としての関わり』は、介護に必要な知識、技術、価値観、態度など、理論的に成り立つものを基盤に、客観的な視点を持って接した結果生まれたものである。【利用者への尊敬と共感のまなざし】については〈利用者の潜在能力に触れたことで高まった学習意欲〉〈利用者への関心と気づきから得られた尊敬の念〉〈利用者とのハプニングが生んだ安全面への意識〉【介護の社会的役割を踏まえた上で自覚した自己の存在価値】については〈介護に専心したことで築けた信頼関係〉〈利用者との信頼関係の上に成り立つ介護ケア〉〈自分は介護学生として認められたという自身の存在価値〉となり、介護の本質に立ち返ることや自分の介護福祉士としての将来像を描く機会となった。

『人間対人間の関わり』

【直接的に励まされ癒された体験】

① 〈日常のねぎらいや励ましよる勇気づけ、支え〉

「利用者の方から“いつも大変なお疲れさま”“ありがとうございます”“ご苦労さん”という言葉に助けてもらった”そして「今日も一日頑張ろうと勇気をもらえた」「その言葉は最初意外だったが、だんだんがんばらないといけない、ここで投げ出してはいけないと思えた」その後「コミュニケーションが取りづらい人にも話していこう」と利用者の力によってケアされ、前向きな気持ちに変化した。また「その人のそばにいと安心できる。そういう存在って必要」であると感じ、慣れない環境で緊張して実習している学生が心の安定を図るきっかけとなった。

(学生A)

② 〈日々の挨拶や会話から得られる家族のような感覚〉

「今日はもう上がりなんで帰ります、また明日お願いします”って言ったら“今日はあがり？ありがとう”って言われるのがまあ、一番嬉しかったし、そういうのが癒された。“月曜日また来ます”っていうと、向こうから“お疲れ様だねー、疲れたねー”って“家でゆっくり休まんといかんねー”って言われました。金曜日で帰ってまた月曜日に行くってことも、“土日は来ないね”って“寂しいね”って言われて・・・”という何気ない挨拶について「普段の生活では味わえない気持ち。だって実習での利用者さんと全然知らない人じゃないですか。街中で人に会って挨拶

はしても、ありがとうとか言われる機会はそうないじゃないですか」と、介護の場面でしか味わえない気持ちを実感した。そしてその利用者の視線は学生を家族の一員のように捉えており、実習期間中は学生の支えになる役割を果たしていた。(学生G)

③ 〈実習最終日の挨拶で得られた・充実感、達成感〉

「利用者さんから握手を求めていただいて、“あー、ありがとう”みたいな感じで、いつも手は組んで引っこめた状態で自分から何かをしようとする事はなかった人だったので」という体験は「その短い期間の中でも、最終的には心を開いてもらえたのかなっていう嬉しさが、一番感じられた出来事でした」「来て良かったな一って、いいフロアを担当させてもらったなって」というように利用者との心が通じた充実感や実習を終えた達成感を味わうことができた。

そして「でもその瞬間の前までは、今まで福祉とか介護を学んできた中でケアする側・される側っていう目線では見てはいけないうるか、同じその人としてっていう部分で見なきゃいけないのは分かっていたんですけど、やっぱりどうやってケアするのか、とか、技術面の方でこの方の身体状況がこうで、どっち側から支えるのか、どういうふうに声をかけるってというのがメインになってた分、どうしても自分はまだ介護をする側っていう目線が捨てきれずに実習に臨んでしまった部分もありました。でも最後のその日に関しては、普通にほんとに人と人の出会いの中で別れの日だったので、高齢者だからとか、そこの施設の利用者さんというのではなくて、なんか自分の家族のおじいちゃん、おばあちゃんではないんですけど、それに近いような感覚がちょっと湧きました」と述べている。

その結果、「高齢者とか障害があるとかそういうのを、除いて人と人が関わる場所の一つがこの施設だったりとか、そういう福祉の現場なのかな一っていうふうに、すごく感じたのが一番大きいです」と介護の原点に立ち返ることができた。(学生E)

【共にいる「つながり」の実感】

① 〈共に過ごす場と時間によって得られた安心感〉

「レクリエーションを一緒にやっているとき、なんか、ほんと、かわいらしい笑顔なので、4週間も一緒にいる

と、いとおしさが出てくる。そんな日常の利用者さんの笑顔やしぐさにすごく癒される。何気ない会話が嬉しくて、それで頑張れた」その結果「頑張った分だけ、ちゃんと職員さんからもアドバイスいただけたし、利用者さんからもほっこりするようなものをいただけたなって」「そうになると、わりとリラックスした感じで、実習もできるようになった。お互い、たぶん、リラックス状態が作れるようになって、実習もしやすかったし、利用者さんたちも、こう、違和感を持った生活じゃなくて、自然になってきた」というように徐々に人間関係が成り立っていった。(学生C)

また、「なかなか飲み物がすすまない人に、水分補給で飲んでもらおうとしたら、“もういいです、あなたどうぞ、飲んでください”って。誰にでもそう言っていると思うんですけど、実習生ってわかっているかどうか、ちょっとわかんないんですけど、でも、そうやって話してくれているってことは、なんか、そういう嫌な人っていう人じゃないな、ってわかって言っている、わかっていただけでるかな、って。話し方がかわいらしくて、微笑ましいなって」というような〈一緒に過ごす場と時間の充実感・安心感〉が持てるようになった。

その後、「やっぱりわたしは、アルバイトでもそうなんですけど、人と関わること、ずっとじゃなくても人と関わったりとか、介護も対人援助って言われるじゃないですか、でも、やだなって思うときもあるけど、そうやっていろいろ関わってきて、多分わたしはいろんな形で人と関わっていく仕事をしていくんだなって。いろんな利用者さんのなかで、歌を歌ってくださる利用者さんもいれば、気分の浮き沈みのある利用者さんもあるんですけども、そういう方たちと接しつつ、やっぱり人と関わっていくんだなって」という思いに到達し、介護に従事する自分の将来像を描く機会となった。(学生D)

② 〈出会いと別れの体験から感じた一期一会〉

「実習最終日に挨拶に行って、食事介助をやらせてもらってありがとうございますって、お風呂の入浴介助もやらせてもらって、それを伝えたら、ありがとうね、また遊びに来てねとやさしく言われて、さすがに泣きそうになって、それが嬉しかったですね」と述べ、そのときの気持ちとしては「感謝の言葉を言われたのは初めて。拘縮があって、ずっと寝たきりか、車いすかという方。あんまりしゃべることがなかった人。あまり反応してもらえないし、食事の時しかほとんど関われない人、私が

上手くできないこともあって、イラッとして、“へたくそ”って言われて。最後に、ありがとうございます、というのと、お世話になりましたって、半分泣きながら・・・、そんなふうに思ってもらえているとは思ってなかったし」と、そのときの様子を思い出すと「別れとか、そういうときは、・・・(言葉に詰まり涙が止まらなくなる)」出会いと別れの感謝と別れの切なさとして〈出会いと別れの体験と一期一会の意味〉を実感し受け止める体験となった。(学生B)

③ 〈利用者の喜びを自分の喜びと感じ利用者の立場に立つ気持ち〉

「昔、そろばんを使って仕事をしていたってことで、実際にそろばんを持って行って渡すと、嬉しそうにニコニコ笑顔だった。たぶん、初めて笑顔見られたんですよね。そろばんの球をはじく感覚が楽しそうだったんで、よかったなあ、と思えた」利用者の様子は「昔は球の数が違ったらしいんですけど、すごい、ニコニコの笑顔で」「その人は、口がうまく閉まらなくて、いつもよだれが垂れていた人なんですけど、なんか、いつにも増してよだれをタラタラ垂らして、喜んで、そういうところを見たら、ああ、よかったな、って思いました」というように回想法によって利用者の笑顔を引き出すことができ、学生自身も利用者の喜びを自分の喜びとして共感することができた。

しかし、「そのときはよかったな、と思っていたけど、記録に書く段階になって、やってみよーっという軽い気持ちだった、その人の立場を考えてなかったと思った」「仕事でもう十分やってきたのに、今になってまたやってもらうって、本当にその人がやりたいことなんだろうかって」と悩み、その人らしさを支える介護について深く模索する機会となった。(学生F)

『介護専門職としての関わり』

【利用者への尊敬と共感のまなざし】

① 〈利用者の潜在能力に触れたことで高まった学習意欲〉

「最初挨拶にあって1回だけ“〇〇です。お願いします”って言っただけなのに、次に会って職員さんが覚えてる？って聞いたら“〇〇くん”って言われて、すっげーなって。口から食べられないし、ずっと横になっているのにおむつ交換をやらせてもらったんですよ。そしたら、呂律がまわらないなりに、“ありがとうございます”って言われて。

搾り出すような感じで言われて。すごい、言えるんだと思うし、ちゃんとわかっている一つて。何してほしいつて言えるし、テレビのチャンネル変えてつて言えるし、この人すげーなって思う」その結果「がんばり、じゃないですけど、やる気になってくるつて感じですかね、そういうのを見たら」というように、身体的な障害が進んでも意思疎通ができることに心を動かされ「その人の持つ力」を読み取ることで利用者への理解が深まり、次への学習意欲につながっていった。(学生G)

② 〈利用者への関心と気づきから得られた尊敬の念〉

「受け持ち利用者のSさんと、共有スペースで塗り絵とかコミュニケーション取ったりしていた時に、通りかかったBさんに、ちょっと見てくれませんかつて声かけたら“あ、ええよ、ええよ”つて。SさんとBさんとあまり話す機会つていうのがなくて、ほとんどなんか顔だけ見てそのまま終わっているような感じだったので、初めてだったかもしれません。その二人と自分を入れて三人で、そしたらけっこう、二人の利用者さん楽しく塗り絵をやっている、BさんがSさんに対して“すごく上手じゃん”て話して、けっこう盛り上がりつて、Sさんもその話を聴きながら笑いながら塗り絵をやつて」

その様子については「自分のなかでも、なんかここまでの変化つていうのは、けっこう驚いて、あ、こんなになんかうまくいくんだ一つて、ほっこりした反面ちょっと驚きはありました」「後から職員さんに聞くと、Bさんは、相手によっては性格ががらつと変わっちゃうんで、たまに急にかつと怒つたりとか、逆に急に黙つたりする方だったので、こんなふうになんかいったのは、驚きでした」といった利用者の交流を通してその後感じたことは、「後々、介助したりとか会話したりするうちに、あ、やっぱりこの人は、この人なりの人生を歩んでる、社会のことを知っている、社会の大先輩つて、自分の中で、年上としての、…そんな感じですよ」という気持ちになった。これは利用者への深い関心を寄せ、利用者を理解しようと取り組んだ実践の過程で得られた尊敬の念であった。(学生H)

③ 〈利用者とのハプニングが生んだ安全面への意識〉

「食事の支度で机を拭いていた時に、一応“拭きまますねー”つて拭いていたんですけど、突然目の前に手が出

現したつて感じられたんでしょね、もう反射的に腕をパーンと」「その方は視野に障害があつて、それはわかっていたんですけども、実際に叩かれると、ちょっと、なんか暴力振るわれたかなつていう感覚に陥つて、ガーンつてきました」「でも後になつてその方が、僕の腕をなでて、なんか“ごめんね”つて言っているような感じだったので、それでなんか、分かつてもらえたのかな一つて思つて、じーんとききました」

「考えてみれば、その方の表情があんまり変わつてなかったつて、もしかしたら、伝わっているんじゃないかなつていう甘い認識だったかも知れません」「確かにあのとき叩かれてそのまま終わつていたら、多分暗い思いを引きずつていたけど、なでてもらえたおかげでちょっと明るくなつたと思います」と、その瞬間、気持ちがりセットされたと感じた。利用者にとっては学生の手が、急に目の前に現れた異物と認識され、それを避けようとした行動だった。「介護つて、結構いのちと隣り合わせの感じなので、一つミスでも、もしかしたら死へとつながっちゃうんじゃないかつていう、その、小さなミスでも大きなミスへとつながつてしまうんですけども、このときは何かしら自分の中で救われたような感じはありました。」というように、介護は常に危険と隣り合わせであるという危機感を持つ機会となった。(学生H)

【介護の社会的役割を踏まえた上で自覚した自己の存在価値】

① 〈介護に専心したことで築けた信頼関係〉

「受け持ち利用者さんは徘徊がある方だったんで、どうしたら戻つていただけるかつていうのが、歩いて行つて、どこまでが歩けるのかとか、そういうことは、毎日あつたんで、そういう中で工夫をしていたんですけど」「結局、何ですかね、答えは出てないというか、どれが正しいかつていうのはわかんなかつたんですけど」「歩いて行つて、だいたい座つて休憩されるんですけど、そういうときも、隣に座つてみたりすると“帰りた”つて言われて、なんか話し掛けてこられるようなときもあつて」「あるとき、ずっと座つて待つてみようと思つて座つていたら、“家に帰りた”つて言われて。“えー、なんですか?”つて言つたら、“畑がある”つて言われて」「こんなふうになんか隣にいたりすると、フロアで座つてるときに暇な状況で一人にされると大きい声で、なんか声を出されることもあるんですけど、そういうのと違つてつぶやきつていうか、僕に伝えてるように、帰りた

んだ、っていうのを伝えてる感じがあったんで。じっと一緒に座っていると、多分話し掛けてもらえるんじゃないかなっていうのは、ありましたね」「それはやっぱり、一番通じ合わなければ、信頼関係がないとできないことだと思うんで」というように、学生がじっと寄り添うことで、次第に信頼が得られ、利用者が本心を表出できる人間関係ができていった。(学生I)

②〈利用者との信頼関係の上に成り立つ介護ケア〉「利用者さん発信で僕に話し掛けてこられる時とかは、なんか些細なことなんですけど、嬉しいですね。トイレに行きたいとか、お部屋に行きたいとか、そういうのも、意外と嬉しいかなと思うんですが、我慢されるよりも「他人にトイレに行きたいとか言いづらかったり、部屋に行きたいとか、気遣う方もみえるんで、言っただけになるっていうのは、信頼関係を持って接していった結果がそういうことだったんで、そういうところは、すごい、嬉しかったですね」「ありがとうとか、お礼を言ってもらったのは、それもすごく嬉しいですよ、やっぱり」というように、信頼されている実感を持つことが日々の介護実践へのやりがいにつながり、積極的にケアを進めていくための糧となった。(学生I)

③〈自分は介護学生として認められたという自身の存在価値〉

「自分の名前を覚えてもらったことが嬉しかったです。4週間という実習のなかで、3週間目の後半ぐらいから、“もうすぐなくなっちゃうから、寂しい”って言われて、短い実習期間だったんですけど、実習生として、認めてもらったというか、それがうれしかったです」「ちょうど利用者さんがテレビを見ていて、車いすに座って机のところにいる状態で、ちょっとしゃべっていて、利用者さんがポロッと、“もうすぐだから、いなくなっちゃうから、寂しい”って・・・」「寂しいって言われたのは1回ではなくて、何回か言われたんで、そのとき、びっくりしました」「言われたときは、“実習はもう少しですからね”という言葉が返しました。でも、あとから、そのことをプロセスレコードに書いて振り返ってみて、利用者さんの寂しい気持ちにもう少し寄り添ってもよかったのになって。ああ、確かに、自分のことだけ言っていたな、っていうのを思いました」と利用者の言葉の意味を受け止めて利用者の気持ちを推し量ることの大切さを考える機会となった。(学生D)

考察

学生が体験したヒューマン・ケアリングについて、『人間対人間の関わり』と『介護専門職としての関わり』に焦点を当て、その過程を実習教育の視点で考察したい。

1. ケアリングの背景にある実習環境

1) 実習先の介護理念、介護モデルとしての職員の日常の姿

学生が語ったエピソードは、学外という慣れない社会的環境の中、いかに人間関係を構築し、自分の居場所を確保し、自己の存在価値を見出すかという介護実習の過程での出来事であった。それは、ごく日常の一場面や人と人との出会いと別れの一場面である。

エピソードの時期はいずれも4週間の実習中の半ば以降～後半にかけてで、学生がようやく実習環境に慣れ、利用者とのコミュニケーションがスムーズに取れるようになった頃である。それは学生ばかりではなく、施設の利用者や職員にとっても学生の性格や行動の特徴などを徐々に把握し、どのような対応や指導が適しているのかということをつかむことができるようになった時期でもある。利用者与学生の双方向の交流によりケアリングが成り立つためには、いわば準備期間のような時期を経る必要があった。

高齢となり認知症などの障害が進む様々な心身状態の方が生活する施設において、学生のために自ら力を出すことができる利用者は一部の方に限られる。それでも学生が語ったいくつかのエピソードのように、利用者が学生を励ましたり癒したりできるのは、施設の理念に沿った職員各々の介護実践や、穏やかな日常生活への環境作りが、日々たゆまず行われているからである。また、学生が利用者の生きる姿に素直に感銘できるのも、学生一人ひとりの実習状況を共有するために職員間で連携がなされ、できるだけ有意義な体験ができるようにという教育的配慮が基盤にあるからである。

このように、ケアリング過程のスタート地点には、学生を取り巻く人的環境がすでに施設の日常として存在しているという背景があった。

2) 学生が来るのを楽しみに待つ利用者

単調になりがちな施設生活のなかで、介護を学ぶ学生が実習にやってくる期間は、施設にとって新鮮な風が吹き込まれるような状況となる。そして、実習生が訪れることを楽しみに待つ利用者もある。

学生との利用者のケアリング過程には、学生の努力もさることながら、利用者の力が大きく作用する。中には学生のために役立ちたいという思いから、その人の持つ力が引き出されることもある。

また、親身になって介護に専念する学生との関係性は、期間限定であるがために、「会えなくなるから寂しい」「元気でね、また来てね」という別れのときの言葉通り、学生が不在となった喪失感に気分が落ち込んでしまう利用者もある。そこで、また次の実習生が来るのを楽しみに待つ、という気持ちに転換できるように職員は利用者を支えているのである。

2. ケアリング体験による影響と変化

1) 信頼関係を築く過程にあるケアリング

「感謝の言葉を言ってもらえたのは初めてだった。そんなふうに思ってもらえているとは思ってなかった」というように、学生はそれまで気づいていなかっただけで、日々の関わりによって徐々に信頼関係が築かれていった過程をエピソードの背景に読み取ることができる。

M・メイヤロフは著書『ケアの本質』でケアの主な要素の一つである「信頼」について「“あの人は私を信頼している”という認識は、ケアされている人がそのような信頼が正しいものだと思い、自分自身が成長していくのだということを確認するのに、大きな力を発揮する」と述べている。

学生 B のエピソードでは「食事介助のときに“下手くそ”と言われたり、誤嚥がすごく心配だったり、技術的にうまくいかないことで辛いと思ったこともあった。でも、最後にありがとうと言われたときは、びっくりしたし、ほっとした」という言葉は、そこに至るまで試行錯誤が繰り返された結果、得られたケアリング体験であることを意味している。他のエピソードでも同様に、学生は、容易ではなかった過程を踏んだからこそ、嬉しかったと思える出来事が心に残り、これからは介護をやりたいという意志へとつながったのではないかと推察される。

また、学生 I のエピソードでは「あるとき、ずっと横に座って待ってみようと思って座っていたら、“家に帰りたい”って言われて。(中略) 帰りたい気持ちを伝えている感じがあった。じっと一緒に座っていると、多分話し掛けてもらえるんじゃないかって」「それはやっぱり、一番通じ合わなければ、信頼関係がないと、できないことだと思う」と語り、徘徊に付き添って歩き、座り、耳を傾けるというケアへの専心の結果、心が通じて嬉しか

ったという感覚を信頼関係という言葉で示している。このように、利用者との信頼関係構築の過程そのものがヒューマン・ケアリングであるといえる。

3. 介護福祉教育におけるケアリングの意味

1) 人間的な心の交流と専門的知識・技術の両輪によって成り立つ介護

インタビューのために用意されたエピソードは、シスター・M・シモース・ローチが著書『アクト・オブ・ケアリング』で述べた、思いやり (Compassion)、能力 (Competence)、信頼 (Confidence)、良心 (Conscience)、専心 (commitment) という「職業的ケアリングの諸属性：五つの C」と、ミルトン・メイヤロフの「他者の成長をたすけることとしてのケア」をあらかじめ意識したものであった。そこで取り上げられた具体的な内容には、『人間対人間の関わり』による人間的な心の交流の場面と『介護専門職としての関わり』による知識・技術が反映された場面の両者が、バランスを持って相関する構造がみられた。

日本介護福祉社会において平成 26 年に示された介護福祉士の専門性とは「利用者の生活をより良い方向に変化させるために、根拠に基づいた介護実践とともに、環境を整備することができること」である。

人として温かい心で関わる側面と、専門分野の判断力や行動力をもって関わる側面の、どちらか一方に偏ることなく両輪として進むことで成り立つのが「介護におけるヒューマン・ケアリング」であるといえる。

学生 H のエピソードの、利用者に突然腕を叩かれショックを受けたが、しばらく後にすまなかったというように腕をなでられたという場面で「介護って、結構いのちと隣り合わせの感じなので、一つのミスでももしかしたら死へとつながっちゃうんじゃないかって。このときは何かしら自分の中で救われたような感じはありました」と語った内容は、単に利用者のしぐさに救われたということだけに終わらず、利用者の行動から学んだ状況判断の重要性であった。

また学生 F のエピソードでは、昔仕事で使っていたそろばんを提供する回想法を行い、利用者の嬉しそうな様子に自分も喜びを感じることができたが、それだけに終わらず「仕事でもう十分やってきたのに、今になってまたやってもらって、本当にその人がやりたいことなんだろうか」という疑問を持ち、そこで「その人らしさとは何か」について悩み、様々な文献を読んで「介護の本

質」について模索する機会が得られた。

2) 自分の将来像を描くためのフィールド

実習前後の学生の生きがい感の変化について、津田(2011)は「生きがい感が実習後に上昇した理由として、実習を振り返るなかで、多くの学生は自己の学びから成長を実感し、充実感を味わっていた学生が多く、実習中に利用者との関わりから介護過程を展開するなかで喜びを感じ取っていたことが影響している」と述べている。また、「学生の視点から考える介護のやりがい」についての調査(三宅,2016)では「学生は生活を支援する介護福祉士について”ありがとう”と人から感謝される仕事に誇りを持っている記述も多くみられた」という結果が出ている。

学生 D は「やだなって思うときもあるけど、そうやっていろいろ関わってきてみて、多分わたしはいろんな形で人と関わる仕事をしていくんだなって」「いろんな利用者さんがいるなかで、歌を歌ってくださる利用者さんもいれば、気分の浮き沈みのある利用者さんもいるんですけども、そういう方たちと接しつつ、やっぱり人と関わっていくんだなって」と述べていた。学生それぞれが、実習におけるケアリング体験により自己存在感が与えられて自尊心を高めることができ、その結果、介護福祉士としての将来像を描く機会となったのである。

結論

ヒューマン・ケアリングの過程として、学生にとってはまず実習環境に適応するための2~3週間の期間を経ることが必要であった。また、そのスタート地点には、できるだけ有意義な体験ができるようにという実習施設側の教育的配慮と、そこに生活する利用者という人的環境が備わっていた。

ヒューマン・ケアリングが可能になるまでの人間関係構築の過程は学生にとって容易ではなかったからこそ、深く心に残る体験ができ、介護の道を進みたいという意志へとつながった。

ケアへの専心の結果、心が通じて嬉しかったと感ぜられるような体験ができ、さらに利用者への共感的理解が深まり、その信頼関係によって積極的な介護実践につながった。ヒューマン・ケアリングとは、「信頼関係の構築の過程そのもの」であった。

また、人間的な温かい心で関わる側面と介護の専門的な判断力や行動力をもって関わる側面が、共に両輪とな

って進められるヒューマン・ケアリングこそ、介護専門職として最も必要な能力の一つであることが示唆された。

謝辞

本研究の実施にあたり、快くご協力くださいました A 大学の学生の皆様に心より感謝申し上げます。

文献

- ミルトン・メイヤーロフ：ケアの本質 生きることの意味
ゆりみ出版,17-32,1987
- 林雅美：高校生の介護の仕事に対するイメージに与える要因 介護福祉学,Vol.23.2,89-97,2016
- シスター・M・シモーヌ・ローチ：アクト・オブ・ケアリング ケアする存在としての人間 ゆりみ出版,97-111,1996
- 横山さつき：介護実習における学生の不安に関する因子分析的研究 中部学院大学・中部学院短期大学部研究紀要第9号 125-133,2008
- 山本浩子(他)：老年看護学論履修後に学生が捉えた「ヒューマン・ケアリングの意味」 日本看護福祉学会誌 Vol.17,147-156,2012
- 山田美幸(他)：看護学生が臨地実習におけるケアリング体験の意味を構築する過程 日本看護学教育学会誌 Vol.22,No.3,1-11,2013
- 戸村道子：ヒューマン・ケアリングを基軸とするカリキュラムー看護学生のヒューマン・ケアリングの意味と価値を深めるためのポートフォリオの活用 看護研究 Vol.44-2,185-187,医学書院,2011
- 永島すえみ：我が国の看護における「ケアリング」論の導入と研究の動向 仏教大学教育学部学会紀要 第12号,99-111,2013
- Jean Watson：ワトソン看護論 人間科学とヒューマンケア 医学書院,41-47,1992
- 田中千枝子(他)：社会福祉・介護福祉の質的研究方法 実践者のための現場研究,中央法規,117-130,2013
- 佐藤郁哉：質的データ分析法 原理・方法・実践,新曜社,59-73,2017
- 白井志津子：介護職におけるホスピタリティの重要性に関する検討 広島大学マネジメント研究,17号,13-21,2016
- 吉田清子(他)：介護観の分析からみた介護実習の効果評価研究 岩手県立大学社会福祉学部紀要,第17巻,43-49,2015

公益社団法人 日本介護福祉士会：介護福祉士の専門性

<http://www.jaccw.or.jp/fukushishi/senmon.php>

津田理恵子：実習前後の学生の生きがい感の変化から

介護福祉教育,第 16 巻第 2 号 53-57,2011

三宅真奈美 (他)：学生の視点から考える介護のやりがい

とは 川崎医療短期大学紀要 36 号, 39-46,2016

The human caring process experienced by care practice students

—Through the relationships with the elderly persons

in the nursing home—

ENDO, Sachiko, ARAI, Mihoko, MUROTO, Syinya, and MIWA, Sachiko